



3月のさろんテーマ

ユニークな現代風試みのスローライフ

瀧 栄治郎 (日本テレネット株式会社会長、NPOスローライフジャパン理事)

瀧栄治郎さんは、京都市に本社を置く日本テレネットの会長であり、仕事面では、大きい、強い、速い最新鋭企業を引っぱっています。その一方で、太陽光発電と野菜づくり、京都の格式ある古川町商店街の再興などユニークなスローライフの試みに挑戦しています。

■ “幸せとは何か” を考える時代

わが社はIT企業で、昨年30周年を迎えた。日本で戦後30年以上続くのは千社に1社くらいしかないらしく、30年続けることができ感謝している。仕事はファストなので、社員の心と身体の乖離もある。そこでスローな価値観を求めていた時にNPOの皆さんとの出会いがあり、さまざまに関わらせていただく。

日本は豊かになった。今、痛切に感じるのは、物の豊かさの次の価値、幸せとは何かを考え、そこに投資をしなければならないということ。その挑戦をやろうと考えている。

■再生エネルギーと緑のスマートオフィス実験

厚労省が「けいはんな学研都市」に500億円以上かけて「私のしごと館」をつくったが機能せず、2010年に閉じた。何とかしてくれと京都府から相談を受け、私は「再生可能エネルギー発電所をつくれるなら」と条件を出した。

規模は小さいが、500kwの太陽光発電所ができた。ここを私どものコールセンターにして、エネルギーと食料の自給・自活実験を4月から始める。発電効率を上げ、新しい蓄電設備を開発し、100%自立するシステムを狙っている。社員の通勤も電気自動車を使う。

シドニー大学が、人間は植物を見るとストレスが3割減り、生産性が15%上がる実験結果を発表した。そこで浜松先端大学と共同して、緑によるオフィスの知的生産性測定と野菜の栽培方法の確立、このシステム全体の商品化を目指す。余剰電力でオフィスの机の前に小型ハウスをつくって葉物野菜を育てていく。21世紀型オフィスへのチャレンジですね。

■ネガティブな商店街だって、変わる

京都市の古川町商店街に挑戦している。錦と同じ賑わいだったが、全長220mに34店舗、シャッター店舗11、来客数1,400人、店主平均年齢60歳、理事平均年齢65歳。後継者がいる店舗が3軒と、全く寂れた。

ここでは集客イベントと新しい店舗の誘致を提案した。集客イベントは古川町の商店だけ

では無理。屋台をつくり京の一流の店10軒を誘い、チラシも撒き、にぎわいをつくりだした。イベントを4回やり、最初4,500人、最後は7,000人まで増えた。次は1万人を狙う。

繁盛した頃に資産をつくった店主たちは、「イベントまでしてお客はいらぬ」と、最初はネガティブだった。しかし一旦にぎわいを経験すると、元気になった。そこでコミュニティサロンをつくって、商店街の核にした。

料金2,000円で湯豆腐すくいをつくったり、その後湯豆腐パーティをする職人教室、コンサートやイラスト教室をしたり。外国人にも人気が出た。新店舗を1年で3店舗持ってきた。

1 商店街だけでまちは変わらない。周辺の16町会21,000所帯、大学・企業にも声を掛け、みんなで地域をよくする運動に広げてきた。補助金で甦っても長続きしない。商店モールそのものを価値化して利益を生む企業組織にしようとして呼びかけている。

■CSR(社会貢献)からCSV(価値創造)へ

1970年代のマイコン時代、日本とアメリカは拮抗し、サッポロバレーがシリコンバレーのライバルだった。今、東芝やソニーが不調で、最盛期のハード、ソフトが散逸の危機にある。それを全部札幌に集めて文化的な価値に置き換えて、コンピュータ・ミュージアムを創ろうという話が動いている。ミュージアムができれば産業遺産となり、教育・観光の資源になる。

企業の社会貢献=CSR から企業が社会的価値を創り出す時代=CSVに移行していると思う。新しいワークスタイル、新しい商業空間、新しい文化の創造で社会的な価値を創り出せば、地域に密着した持続性のある新しい経済価値が生まれる可能性があると考えている。

【意見交換】

Q そうした活動のベースに何があるのか。

A 僕は分散型社会のほうがいいと思う。エネルギーもそれぞれが自給して分散する。商店街も東京一極集中でなく、その町らしい商店街の賑わいをもつ。文化も歴史を大事にして、そのエリアらしい文化を育む。それがスローライフの考え方だと思う。

その方向へとお金が動いていく新しい価値をどう創出するか。それがワクワクドキドキを生む。楽しいですよ。

(2016年3月15日開催)